

その 園 井 英 秀

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 142 号
学位授与年月日 平成10年12月17日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 冬の日覚め——ロバート・グレイヴズの詩と批評——

論文審査委員 (主査)

教授 原 英 一 教授 小 澤 博
教授 中 村 捷

論文内容の要旨

ロバート・グレイヴズ (Robert Graves 1895-1985) の文学的価値に対するアントニー・バージェス (Anthony Burgess) の弾劾は、今日におけるグレイヴズ再評価以前の、グレイヴズの業績に対する不当な閉却の代表的調子を示すといつてよい。

... Graves's importance as a poet still seems to be in doubt. He has produced enough to ensure that (as with Wordsworth) at least ten percent of his output has to be taken seriously, but there is not one stanza or even line of his that has become a common quotation among the literary. (*TLS*, 1982)

この文脈におけるバージェスの指摘は、ワーズワースとの比較も含め、文学サロンにおける無責任な談話に似て不正確極まる判断であり、誠実な文学批評であるとは到底言えない。イギリス文学を読むものであればワーズワース作品のわずか一割が読むに値するとする評価をまじめな批評であると受け取るものはいない。グレイヴズの場合も同様であり、かつその作品の1行さえもが文学的場面における引用の対象とはなり得ていないという要約は、そのいずれの点においても誤りである。

グレイヴズの文学的アウトプットは、全詩集では、*Poems 1914-26* (1927) から *Collected Poems 1975* (1975) に至るまで6冊、作品数は約1000編に達する。今日のグレイヴズ批評においては少なく見積もってもおよそその半数は十分に誠実な批評的分析の対象であるのみならず、20世紀イギリス詩のランドマークとなり得る作品も多く含む。散文作品においては、極めて引用度が高い *Goodbye to All That* (1929)、あるいはクローディアス (*Claudius*) シリーズ (1934) を代表作とする小説21編、さらに、*A Survey of Modernist Poetry* (1927) や *The White Goddess* (1948) 等の批評作品20編は、20世紀イギリス文学において重要な示唆を与える業績である。これらの事実を見誤る評価は、グレイヴズに対する評価のみならず20世紀イギリス詩を概観する批評的判断としても、単なる偏見あるいは認識不足として済ませることはできない。

本論文の目的は、このような批評的状况に鑑み、第一に、20世紀前半のイギリス詩の文脈におけるグレイヴズ詩作の近代的意味とその重要性を明らかにし、グレイヴズ文学の再評価を行うこと、第二に、グレイヴズに対するローラ・ライディング (Laura Riding) の文学的影響についてその正確な意味を究明すること、第三に、グレイヴズの文学的特質がイギリス詩の伝統的感覚を継承するものであるとする仮定に立ち、その反モダニスト的姿勢を証明することにある。

グレイヴズは自らの詩作についての自意識を強く持つ詩人である。その批評も、究極的には自らの詩作についての覚え書きであると要約することができる。作品の多くは詩作行為を主題とするものである。この意味で詩はグレイヴズにとり詩的精神の軌跡である。—“A value of collected poems should form a sequence of intenser moments of the poet's spiritual autobiography.”—詩が精神的自叙伝であることを確認するグレイヴズの感覚は、その詩的アウトプットが自らを題材とするものであるという意味においてロマンティックである。詩作の精神状況は、バラッドあるいはナーサリー・ライムの感覚の再現、戦後期の精神的不安定を示す心理的関心、ミューズへの献身と詩的ディシプリンの追求等のいずれの局面においても自らの詩的存在を問う姿勢として見ることができる。グレイヴズの発展が長期間の詩的キャリアにおいて持続する理由は、第一に詩人が自らのロマンティックな資質を必ずしも望ましいものとは考えず、詩的成熟はその資質を抑制することによって深められるとする自覚を持つこと、第二に詩の芸術的特質に対する認識が深まるに従い、現実的価値との葛藤を内包する新たなロマンティックな感覚を把握し、この対立的経験を詩作の必然とする意識を持ち得たからであるといえる。第一の段階は、マヨルカ (ライディングとの共同文学活動を可能とする孤立的環境といえる) における独特の芸術的ディシプリンの実践として存在し、第二の局面における詩的解放は、ライディングの影響からの離脱と新たな詩的自我の発見として認識される。この経験における最大の問題は自らの本質を表現するロマンティックな価値と真の詩的価値との距離をゼロに近づけ

ることにある。本来バラッドやナーサリー・ライムに常に親近感を示すグレイヴズの感覚は、純真、自然、田園、美、愛、想像的領域等を主題とするジョージ朝詩人の感覚との本質的差はなく、この意味においてもイギリス詩の伝統的気質を受け継ぐ。言い換えれば、グレイヴズの場合自らの詩作の本質をロマンティックな視点として理解し、それを追求する限りにおいては特に詩的葛藤を予期することはない。

グレイヴズの感覚は、詩が日常的には読者に精神的、道徳的慰安を与え、芸術的には理想とする詩的価値を追求するものとする素朴な理解があり、このロマンティックな把握を超える基本的芸術的問いはいわば当初から省略されている。この状況において詩作の必然性を問う態度はグレイヴズの場合、19歳で遭遇する戦争体験をその契機とするという皮肉な性質を持つ。グレイヴズの詩的発展はそのキャリアにおいて何らかの外部的刺激を必然とすることが特徴的であるとはいえ、塹壕戦争の現実的体験がその使命を担うことは悲劇的である。この体験は戦争詩のジャンルにおける詩作意識を先鋭化するのではなく、むしろ重傷による除隊後その深刻なトラウマとして詩人を苦しめる。それは詩作に対する展望を絶望的とする精神衰弱の状況に追い込むものである。即ち、詩人の精神の内奥における苦悩は詩作の試練を与えるというより詩的自我を見失わせ、芸術的希求の強さに拘わらず詩作を惰性化する。以来、グレイヴズの詩的葛藤はこの意味で常にクリシェを脱する詩作の可能性を追求する問題として存在する。

ここに一つの皮肉な事実がある。シュルショックに起因する神経衰弱は、その精神の鋭敏な活動においてある重要な発見をグレイヴズにもたらす。それは、詩作が本質的に非理性的衝動（詩的インスピレーション）によって支配されるとする信念である。この理解は一方で詩的自我の発見を困難にするが、他方詩作衝動の神秘的性質を確信させる。この局面で、グレイヴズがフロイト派心理学者、W. H. R. リヴァーズの学説を援用し得た意味は大きい。芸術的創造を人間精神の非理性的活動とする仮説は詩作の心理的メカニズムに対する科学的サポートであり、すべて不確定、不安定の状況にあるグレイヴズが唯一確信し得るものである。事実この信念は揺らぐことなくグレイヴズ詩作のコアとなると言ってもよい。

この事実拘わらず、1920年代の詩作は不安定と混迷の状況を露わにする。詩作と非理性との必然的関係を追求する姿勢は一定であるがその答えを見出すには至らない。詩作の混乱は、現実と観念、感情と理性（グレイヴズの場合には知性）、芸術的価値と非芸術的価値等の葛藤として存在する。

In the period of conflict, poetry may be either a partisan statement in the emotional or in the intellectual mode of one side of the conflict ; or else a double statement of both sides of the conflict. (*Poetic Unreason*)

葛藤とは具体的にはジョージ朝詩の感覚からの離脱意識、戦場の現実と詩的価値の懸隔、戦争

神経症と家庭的不幸による精神的苦悩、詩的自我意識の喪失、芸術的メンターの喪失等の絶望的展望として持続する。

ライディングの芸術的インパクトはこの状況において発生する（グレイヴズは1925年、ライディングと運命的に出会う）。ライディングはアメリカの詩的精神に見切りをつけた芸術的エミグレであり、極端な芸術至上主義的姿勢を持つ。その独善的ではあるが、強い芸術的主張と特権的意識を特徴とする芸術感覚はグレイヴズ詩作の混迷に対し啓示的衝撃を与える。少なくともグレイヴズの自覚はそうであり、このために過去の日常的、芸術的な価値のすべて（“all that”）に対する訣別の意志が表明される。ライディングの思想は歴史的、社会的、個人的価値をすべて捨象し、純粹に詩の純粹性のみを強調する極端に排他的な原理を持つ。その理論と詩作姿勢における強い個性と唯我論的態度は芸術的孤立を余儀なしとする（マヨルカはこの意味において必然的文学環境である）が、少なくともその芸術的エリティズム、批評における知性、現実的価値に対する明快な否定等の姿勢はグレイヴズの芸術的スランプを解消する有効な可能性を示唆する。

出会いの状況はたしかにそうであるとして、マヨルカの状況を要約すれば、客観的には、ライディングの芸術的影響がグレイヴズにおける混迷を解決する方向を明確に示したと見ることは必ずしも正確ではない。1938年に至るまでの共同生活においてグレイヴズ詩作における葛藤は持続し、詩が本質的にグレイヴズ感覚を示すことは変わらない。とは言え、ライディングの影響を啓示的とするグレイヴズの自覚を全く軽視する解釈も他方において適切とは言えない。ライディングの芸術的感覚は確かにグレイヴズの詩作に忠告を与え得る明快なプリンシプルを有する。詩作における芸術至上主義的姿勢は明らかにモダニストの感覚であるが、ライディングの場合それは詩の純粹性に対する極端な追求として示される。即ちそれは、詩が「真実以外の何物も表すべきではなく、詩を真実以外の名で呼ぶことはできない」とする強い信念として主張されるものである。グレイヴズの場合、自らの精神における二律背反的葛藤に対する鋭い認識に拘わらず、その芸術的信念は単に曖昧というよりむしろ不在である。この状況においてライディングの主張を独善と見る余裕をグレイヴズは持ち得ず、ライディングの詩作哲学を詩作のディシプリンの指針として把握する。

ライディングの批評はたしかにグレイヴズの弱点を鋭く指摘する。「自らのことについて書くことは止めよ」とする忠告は、20年代の状況においてグレイヴズ詩作の低調の原因を正確に言い当てるものである。即ち、それはロマンティックな感覚の抑圧を意味する。グレイヴズ理解は正確であり、自らの感情的価値を反映するものをすべて抑制する認識を得る。マヨルカにおける詩的ディシプリンは従ってこの意識を持続することにあると言ってよい。グレイヴズの詩の質がこの段階において高められる事実は確かにある。30年代におけるグレイヴズ作品は

その客観的視点と知的な表現において詩的洞察の深さを示すことができる。

Must we henceforth be grateful...

That the rusty water...

Our thirst quenches ?

(“Certain Mercies”)

詩の主題は肉体と精神の葛藤に対する弱い存在としての人間的抗議である。詩のペルソナ（この場合は詩人）は肉体の存在を含む呪い（即ち肉欲、欲求不満、あるいは存在そのものに対する憎しみ）を究極的に受け入れるというより、この「牢獄」における状況を挑戦的に肯定する。これは精神の優位を確認するロマンティックな、あるいは感傷的な信頼の態度に対する道義的な怒りである。

That each new indignity

Defeats only the body,

Pampering the spirit

With obscure, proud merit ?

新たな詩的ディシプリンにおいては「曖昧な誇り」で精神が「甘やか」されることはない。葛藤は肉体的呪咀も内包し得るものでなければならず、この認識が感傷とは無縁の、したたかな現実感覚を内包する新たな詩的感覚が存在することを示す。

マヨルカにおける詩的ディシプリンの最大の効果は、詩的テーマに対する集中力とその表現を抑制する力の達成を可能にした点にある。詩はこの力によって緊密な構成を示し知的性質を獲得する。この事実をライディングの影響によるよい結果であるとみなすことは自然である。同時に、この変化をライディングの存在との直接的関係において見るのではなく、グレイヴズ自身の詩的発展において予測し得る成熟であるとする解釈は不可能ではない。たしかにグレイヴズはライディングとの接触以前、既に象徴的手法の発見により詩の主題と表現の形式について素朴なロマンティックなヴィジョンを不十分とする認識を示すという事実がある。*Collected Poems 1938* (1938) はマヨルカにおける詩作の集大成として位置づけられるが、この詩集においてライディングの影響をある程度明らかなものとして指摘し得る場合——例えば “In Broken Images” (1929) におけるように抽象的観念が対比的に羅列される文体 (“Assuming their relevance, he assumes the fact ; / Questioning their relevance, I question the fact,” etc) ——は例外的であり、作品は相対的にグレイヴズ固有の特色を持ち、かつ一定の詩的質の高さを維持するものとみなすことができる。このように見れば、グレイヴズの詩的発展はライディングを芸術的メンターとするが、その芸術的垂流としての変化を示すものではないことを理解すべきである。

ライディングの芸術的影響に対応するグレイヴズの自己修練は、むしろ批評的文脈において見ることができる。マヨルカにおける批評の中心的テーマはライディングの芸術哲学による啓蒙とモダニスト詩批評にある。モダニスト詩に対する批評活動はとりあえず *A Survey of Modernist Poetry* (1924) を刊行するが、これは単に批評というよりグレイヴズ／ライディングの共同執筆を可能とすべき両者の批評的スタンスを相互に確認する作業を意味すると言える。*A Survey* の基本的視点はモダニスト詩を批評の対象とするがそれに対する共感を述べるものではない。事実、ライディングの姿勢はモダニストの弱点を鋭く批判するが、同時に自らモダニストの詩作感覚を共有する部分を（意識することなく）明らかにする。一方、グレイヴズはモダニズムの文体に対する批評を除き、初期モダニスト（と目す一群の詩人）の芸術的性質を十分に理解することなく、曖昧な反発を示すにとどまる。

マヨルカにおける批評のこの基本的姿勢——即ち、ライディングのモダニスト寄りの批評意識とグレイヴズの不確かな批評意識——は両者の芸術的関係を決定すると言える。言い換えれば、グレイヴズの自己修練は第一義的にライディングのモダニスト的感覚をいかに理解し吸収し得るかという方向性を有する。この自覚が詩人の意識に明瞭に存在したとは言えないが、ライディングを師としその影響を自認する姿勢が一方にあり、他方、モダニストとは本質的に異なる自らの詩作感覚の存在は否定できず、このコンフリクトの解決は困難であるとする見通しはある。それは詩的ディシプリンによって解決し得るものではなく両者の芸術的感覚の本質的相違である。この認識は、*Epilogue* 批評（1935-1937）においてその頂点を示すライディングの批評的ヘゲモニーとグレイヴズの影の薄さによって、より明らかになる。この場面でグレイヴズはモダニスト的批評姿勢に調和することなく、伝統的批評感覚を示すに留まる。グレイヴズの詩作感覚がモダニスト詩に調和しないことはマヨルカにおける詩的発現（*Collected Poems 1938*及び *Poems 1938-1945*所収の大方の作品）が証明するとおりであるが、批評意識としてはライディングに拮抗する先鋭さを持ち得ない。*Epilogue* では、文学における道徳的性質を強調する点でイギリスの伝統的感覚を示す重要な貢献をするが、この論点を除き、おおむね第二の声として慣習的テーマ（ロマン派詩批評等）を再現する以上の批評的旗幟を明らかにすることはない。

皮肉な意味では、グレイヴズの詩的ディシプリンはライディングの詩作哲学とそのモダニスト感覚に対する複雑なアンビヴァレンスによって成立する。ライディングからの離脱は、一方で、芸術的混迷の解決と新たな詩作の可能性を啓示し得る詩作哲学と自己集中のモデルに対する断念であり、他方で、ライディングが共有するモダニスト感覚に対する反発を意味する。グレイヴズがライディングから学び得た最も重要な局面は詩作のディシプリンと集中性に対する自覚として示されるものである。それは詩作を行う自己の本質に対する根本的問いかけと新たな

な自我の発見という意味を持つ。この修練は、例えば“New Legends”（1930）あるいは“The Ages of Oath”（1938）等における洗練された詩的特質として見ることができる。同時にこの場合達成されるものはモダニスト詩の感覚とは異なるグレイヴズ本来の詩的感受性、言い換えればイギリス詩の伝統的感覚を内包する詩的特質である。即ち、それはライディング及びモダニスト詩におけるエリティストの姿勢と呼応する難解性、閉鎖性、抽象性との明確な距離を示しそれはほとんどグレイヴズの意識的態度であるといえる。

Did I forget how to greet plainly

The especial sight, how to know deeply

The pleasure shared by upright hearts ?

（“The Ages of Oath”）

「平明な」表現あるいは「廉直な人々」との喜びの共有を回復し、この認識における新たな出発を述べる態度は同時にライディングからの離脱の宣言である。この主題が示唆する詩的特質は、第一に詩的経験における現実的価値の肯定とその平明な表現、第二に読者との道徳的価値の共有を確認するものであり、モダニスト詩と反主題的であることは明らかである。グレイヴズがことさら平明と言い、廉直を言うのは、人生と文学との関係についてのモダニスト＝ライディングの究極的否定の態度に対峙する姿勢を示すことであると解釈することができる。言い換えれば、グレイヴズの主題は、ライディングの芸術的感受性において現実的価値と文学との関係を模倣的（mimetic）であると見るのではなく、人生が芸術より隠喩的に小であり、歴史的限界に住し、芸術的恒久性を持ち得ないとするエリティスト的否定主義に対する道徳的抗議であると理解し得る。それは同時に詩作品における肯定的視点として示唆されるがそれは必ずしも明快な変化として見られるわけではない。

現実の詩作におけるグレイヴズのディレンマは、ライディングの感覚に対する共感とモダニストの感覚に対する反発をその意識において並存させることにあり、この関係における緊張を内包する詩作状況が常に存在すると見なければならない。特にライディングからの離脱の過程でこの状況は複雑な詩的ディシプリンの内実として推移し、グレイヴズの詩的解放はその意味ではほとんど解放の実感を伴うとはいえない。より正確には、ライディング離脱の余波はグレイヴズ詩作において二律背反的の主題が常に並存するという性質を形成し、詩的葛藤はこのパターンを基本的に表すというべきである。40年代における女神を主題とする作品の特質はポスト・ライディング期における感受性を示すというより、むしろ詩人特有の主題としてのミューズの象徴性を追求するものである。ライディングの衝撃の余波は確かにライディングが女神のイメージとして変質したという見方においては存在する。少なくとも、ライディングの影響に対する負い目がグレイヴズの詩作意識において払拭しきれないという意味においてこのイメージを否

定することはできない。同時に、女神の理念とその複雑な象徴的性質についての説明を伝記的背景にのみ求めることが不適切であることは言うまでもない。詩的イメージとしての「白い女神」(The White Goddess)はその神話的、宗教的、文化人類学的、心理学的文脈における女神像を集約する広く深い背景を持つ理念を含む。その要はグレイヴズ詩作の一切のメカニズムを担うミューズとして認識される機能である。この認識において白い女神を主題とする作品の特質は、究極的に自らの詩的洞察を可能にするミューズに対する絶対的献身を表現することにある。この姿勢は詩人が自らに課す詩的ディシプリンの必然性を支える詩作の信念として存在する。

女神を主題とする作品の象徴的性質は基本的にこの意味におけるアンティノミーを詩のエネルギーとするものであり、この葛藤無しに詩は成立しない。即ち、ライディングの余波は女神の二面的性質に対するグレイヴズの認識に潜在的な影響を与えたことは否定できず、葛藤の本質が詩的インスピレーションの性質として追求される過程でグレイヴズの詩的解放が示されると言える。女神の二面性を、同一物の対立する価値として両立すべきものであるとする基本的立場は、つまるところ女神の否定的側面、即ち、詩的インスピレーションを拒絶する女神の冷酷な性質を理解しかつ受容する精神的能力を持つことを意味する。女神＝ミューズへの絶対的服従の姿勢において詩人は自ら常に「ミューズ詩人」であることを確認する状況に置かれるだけでなく、その詩的発現は女神の啓示を忠実に表現すべきものであるという規制を受ける。さもなくばミューズ詩人の特権を失うのみである。——“... something dies in the poet. Perhaps he has compromised his poetic integrity by valuing some range of experience or other... above the poetic.”——女神詩における詩的ディシプリンの厳しさは、グレイヴズの意識において、ミューズ詩人としてこの過酷な条件をクリアすること無しに真の詩作は行われたいとするオブセッションから脱却することはあり得ないとする自覚にある。この過程において詩的葛藤の意味をより主体的に捉える視点が発見されたことはグレイヴズの詩的成熟と言わねばならない。服従すべき女神の価値は絶対的である。同時に詩人の献身行為は自己修練としての主体的意味を有する。詩人はこの発見を女神の絶対的価値が道徳的性質を持つことにおいて確認する。詩作行為がミューズの啓示を正確に再現することであれば、それは究極的に女神の善意を知る行為である。詩作はこの価値を達成することであるという意味において、道徳的性質を持つ。言い換えれば、女神の絶対性は詩の道徳的到達点を示し、詩作行為はこの目的を達成する道徳的ディシプリンである。従って女神の冷酷な側面は、この過程における試練あるいは儀式的通過点と呼ぶべき意味を持つものと確認し得る。女神詩の主題は、女神の象徴性自体にその最終的意味が内在するというより詩的ディシプリンの主体的意味に見出されるべきものであると考えるべきである。葛藤はこの意味で和解に向かう方向性を持つと仮定されることは当然である。

グレイヴズの女神はこの可能性を示唆しかつ常に両面的である。

女神詩の象徴性がグレイヴズの詩的発展を制限するとする解釈は、部分的には不可能ではない。その根拠は、グレイヴズの象徴詩が象徴詩固有の曖昧性を追求すると見るものではなく、神話的象徴としての「白い女神」神話というモノミス (monomyth) のパターンに依存するという限界を内包すると考えるものである。女神詩と散文作品、*The White Goddess* (1948) が相互に関係を持つことは不可避的であり、実際に詩人はこの業績において、詩的文脈と神話的アレゴリーとの調和を追求すると見ることはできる。女神詩が詩的限界を示唆する場合は、その主題が詩的求心性を示すものとして追求されるというより、むしろモノミスの特質を象徴的主題として、拡散的あるいは類型的に表現する作品におけることが認められる。この場合、象徴性は詩的葛藤の内実を伝えるというより象徴の類型的パターンを示すことに終始する。これはたしかに女神詩における弱点を示すと言わねばならない。しかしこれは例外的であり、女神詩の象徴的性質はむしろ詩作のインペタスの複雑な性質を表現する唯一の手法であると見ることができる。事実この認識は40年代のポスト・ライディング期から50年代における詩的ディシプリンの緊張を維持することを確認することができる。特に詩作感覚としてのロマンティックな視点が新たな現実認識を含む肯定的性質を持つものとして示されること、及び詩の道徳的性質を再認識する姿勢が明らかになることは、グレイヴズ詩作の新たな展望を示唆するものとして重要な変化であることを改めて指摘しておかねばならない。

グレイヴズの詩的発展において最も重要な段階はマヨルカにおけるものである。この経験は自らの曖昧な詩作意識に対する厳しい試練であり、同時に詩的自我に対する認識が根本的に問われることを意味する。ライディングがグレイヴズに及ぼした影響はグレイヴズの詩的成熟を方向づける詩的ディシプリンとしての意味を持つものと解釈することができる。それはグレイヴズがライディングの芸術的姿勢に追随するアポスルであるという意味ではなく、むしろライディングの反面教師的意味を強調すべきである。それは要約的にはライディングの詩作原理あるいはモダニスト詩の感覚に対する反発と自らの詩人としての資質がイギリス詩の伝統的感覚を継承することに対する確認であると言える。

...these poems [of *CP59*] ...remain true to the Anglo-Irish poetic tradition into which I was born.

グレイヴズの詩的業績は、20世紀初頭から30年代におけるイギリス詩の状況との関連を視野に入れれば、ジョージ朝詩あるいは戦争詩の重要な局面に主体的に関与することなく、専らマヨルカにおける特殊な文学環境において達成されたという意味では、イギリス詩の近代的性質の形成に深い影響を与えたとは言えない。しかしグレイヴズ／ライディングの文学活動はある意味ではイギリス詩におけるモダニスト詩のインパクトを再現する事例として解釈し得る一面

を持つといえる。ライディングを保留無しにモダニストと呼ぶことはおそらく正確ではないが、20世紀初頭におけるモダニスト詩の概念の曖昧さを考慮すれば、イギリス詩の伝統的感覚を芸術的反主題とみなす姿勢においては、イギリスにおけるモダニストの典型的視点を共有することは否定できない。この意味においてグレイヴズに対するライディングの影響を、イギリス詩の伝統的感覚に対するある種のチャレンジであるとする見方はあながち的外れではない。グレイヴズの詩的発展は、従ってモダニストの感覚に対する反発として確認される興味深い局面を有する。マヨルカの文学的状況は意図的に脱イギリス的姿勢を固持するために、その特殊性をイギリス詩の状況として一般化することは適切ではない意味はあるが、グレイヴズの詩的軌跡は1930年代までのイギリス詩に起こり得た変化を要約的に示すものであると解釈することができる。マヨルカにおけるグレイヴズ／ライディングの文学的状況はこの視点においては特殊な文学的事件であるとはいえない。

論文審査結果の要旨

本論文は今世紀のイギリスの詩人ロバート・グレイヴズの詩作と批評活動を詳細に分析し、その軌跡を明らかにして、現代イギリス文学における位置を確認することを試みたものである。グレイヴズは現代イギリスの代表的詩人の一人であるにもかかわらず、正当に評価されることがなかった。本国イギリスにおいても研究は少なく、我が国においては先行する研究はほぼ皆無に等しい状況である。文学史的には第一次大戦の戦中・戦後派詩人の一群、いわゆる「戦争詩人」たちの一人と見なされるのみであり、むしろモダニズムの先駆的批評や神話研究の業績のみが知られていると言ってもよい。これはグレイヴズの登場の時代がいわゆるモダニズム文学のもてはやされた時代であり、T. S. エリオットが注目を集め、グレイヴズらどちらかといえば伝統的なスタイルの詩人たちが軽視されたためであり、また、モダニズム以降は W. H. オーデン、ディラン・トマスらの活躍の影に隠れることになったためである。しかし、モダニズムは、その本来的性格として、アメリカやフランスから輸入されたものという異質性を持つがゆえに、イギリスの伝統的詩の系譜からは外れるものであることは指摘されなければならない。本論文において明らかにされているように、イギリス詩の伝統的、道徳的主题の正統な継承者であるグレイヴズは、長い伝統の中での正当な位置づけが行われれば、きわめて重要な詩人であることに疑いはないのである。

モダニズムがイギリスの詩壇に与えた影響は非常に大きなものであるが、現時点で回顧してみれば、最終的には捨象されたとみなすことができる。モダニズムの影響とそこからの脱却は、

いわばイギリスの詩全体が経験したことであるとも言えるが、グレイヴズがアメリカの詩人ローラ・ライディングと邂逅し、マヨルカにおいてその薫陶を受けたことは、このような文学史上の事件の個人レベルでの顕現と考えることができる。従って、本論文においては、グレイヴズの「ライディング体験」を中心として論が展開され、その意味するところを追求する努力が相当な部分を占めている。グレイヴズは第一次大戦に従軍し、ソンム戦線で負傷して帰国したが、その結果深い精神的な傷を受けることになった。グレイヴズがこの精神的な戦争後遺症から脱却しようともがいている時代は、モダニズムの台頭と重なっている。モダニズムの詩は T. S. エリオットに典型的に見られるように、(論者の言葉を借りれば)「エリテュスト」的であり、難解であること、ある意味で独善的であることをその特徴とする。ヴィクトリア朝、さらにジョージ朝の伝統の中に位置し、そこで活動を始めた若い詩人であるグレイヴズにとっては、モダニズムのこのような特性は本来異質なものであるはずであった。それが彼に大きな影響を与えることになったのは、彼自身の戦争後遺症と詩作との微妙な関係にその原因があると本論文では指摘される。戦争体験は深刻な傷を彼に与えたが、それは詩作の面では創作活動を促すものでもあった。このことはグレイヴズにとって苦悩と不安の要因となる。精神的傷から治癒することは、詩的インスピレーションの力を喪失する結果となり、詩人としての自分の存在が危うくなるのではないかという危惧である。このような不安は、グレイヴズという詩人が、その創作活動の基盤として、自らを律し鍛練することを常に必要としていたことを示している。本論文においては、「ディシプリン」という言葉が多用されているが、これはグレイヴズの詩作活動においては最も重要なキーワードであると言えよう。また、それはグレイヴズの詩が自己修練の所産であり、その修練の経験そのものを、自らを語るものであって、基底においてきわめてイギリス的な道徳主義をそなえていることを示してもいる。モダニズムとグレイヴズとの出逢いは、詩的創作の源泉としてのディシプリンを常に希求する彼の詩人としての本質とよく一致する面があったことが明らかにされた。

ローラ・ライディングをモダニズム詩人とみなすことにはいくつかの問題があることを本論文では指摘している。ライディング自身もモダニストとの差異を意識していたことは事実である。しかし、その難解性、エリテュズム、神秘主義的傾向といった点で、モダニストとの共通点は多い。グレイヴズにとってもライディングはモダニストとして捉えられたと考えられる。少なくとも彼の「ライディング体験」は詩作活動と批評活動の両面において、モダニズム体験そのものであったとすることができる。とりわけ、ライディングがもたらした「ディシプリン」はグレイヴズにとって非常に重要な意味を持つことになった。ライディングは詩に対して独特のきわめて厳しい考えを持っている。彼女によれば詩は真実であり、詩以外の真実はない。詩は真実を表現しなければならないのである。そのために個人的なもの、私的なものを徹底して

排除し、客観性、普遍性を追求しなければならないとする。論者の説明によれば、「詩は真実であるが故に、純粋な意味においては創作行為さえも拒絶する」ものなのである。詩人としてのライディングがどれほどの価値を持ち、グレイヴズがこのような厳格な詩作態度をどこまで模倣したかについては、疑問が多いことは事実である。しかし、本来「ロマンティックな」資質を備え、ヴィクトリア朝やジョージ朝の詩の伝統に親近感を感じ、それがゆえに詩人としての「甘さ」を自覚していたグレイヴズにとっては、マヨルカでの共同生活を通じてライディングから与えられたディシプリンは、詩作活動の根幹を形成するために有益なものであった。本論文においては、グレイヴズのこのようなライディング体験を、ライディング自身の詩論を深く研究することも含めて、きわめて詳細に検討している。この経験の結果、グレイヴズは戦後遺症による詩人としてのスランプを完全に脱し、新たな創作活動へ向かうことが可能になったことが余すところなく立証されている。

グレイヴズは最終的にはライディングと離別し、その影響からも離脱するのであるが、本論文の探求に従えば、これはモダニズムからの発展的脱却であり、イギリス詩の本来の伝統へグレイヴズが回帰したことを意味している。イギリスの詩は、その伝統的特質として道徳的傾向を強く備えている。戦争体験以来、自らの生き方と詩作活動を不可分のものとし、それゆえに苦悩してきた詩人であるグレイヴズは、自己の抱える私的な問題を詩として表現することが自分の行うべきことであることを自覚していた。それは一方では、普遍性を失い読者との関係を喪失する危険性を持つものであったことは自明である。ライディングから受けたディシプリンにより、自己の甘さを克服し、個人の生の問題、とりわけ恋愛を描く詩人として、イギリス詩の道徳的伝統に立脚した詩作活動を安定して追求することが可能となったのである。

しかし、グレイヴズは1930年代、40年代においても、詩作における根本的なディレンマとの葛藤を継続して経験している。それは詩作の根源にある「女神」ないし「ミューズ」と詩人としての自分の関係である。グレイヴズの代表的著作の一つ『白い女神』は、フレイザー以来の神話研究の系列に属するものと一般に理解されているが、実際にはグレイヴズの詩人としての葛藤を背景としたものである。グレイヴズの見方では、女神は詩人に詩的靈感を与えてくれる存在であり、詩作の源泉である。しかし、一方では冷淡に詩人を突き放し、靈感を与えることを拒否する場合もある。このような「二面性」が女神の本質であり、それゆえに詩人は果てしなく苦悩することとなる。グレイヴズの「女神詩」にはこのような葛藤が描かれるのであり、それはジョージ朝からモダニズムを経て、イギリス詩の伝統的感覚を再認識したグレイヴズが直面した大きな問題であった。本論文では、『白い女神』を中心として、「女神詩」に現れるこの問題を詳細に検討し、グレイヴズの詩人としての独自性がそこに見られることを明らかにしている。

本論文は緻密な構成の下に、一人の詩人の成長をその詩作活動の根源を徹底的に追求することによって十全に記述することに成功している。また、グレイヴズという一人の詩人に焦点をあてているのではあるが、彼のライディング体験がイギリス詩そのものが体験したモダニズムの洗礼のいわば縮図であったことを示すことにより、今世紀におけるイギリス詩の系譜と見取り図を描くことにもなっている。難解なモダニズム詩を十分に理解し、それとの対照において、グレイヴズが持つ伝統的、道徳的性格を浮き彫りにすることとなった。

グレイヴズは『我、クロードアス』などの小説を書いた小説家でもあり、神話の研究者でもあった。本論文を読む限り、グレイヴズの著作活動の全容は必ずしも明確にされているとは言いがたい。また、表題にあるように、詩作の他に批評をも研究対象としているのだが、詩の詳細な分析に比して、批評活動の検討がやや不足しているようにも思われる。特に同時代の T. S. エリオットの創作と批評との対比的な研究が行われれば、モダニズムとイギリスの伝統的詩との対照がよりよく明らかにされたのではないかと思われる。このような面から見れば、本論文は、一人の作家の全体像の解明としては不十分な点を残している。しかし、小説家、批評家としてのグレイヴズは夙に知られていたものであり、評価も定まっていると言える。第一に詩人として評価されるべき作家であるにもかかわらず、その詩作の面が十分に研究されてこなかったことこそが問題なのであって、本研究はそのようなグレイヴズ評価の欠陥を矯正することを第一の目的とするものである。従って、小説家、批評家としての面が相対的に軽視されるかのような印象を与えるのはむしろ当然であるとも言えよう。詩人としてのグレイヴズの半世紀にわたる軌跡の探求は、間然するところのない綿密なテキスト解読と強靱な論考に裏付けられている。本研究が、この不当に軽視されてきた詩人の創作活動の本質を明らかにした画期的研究であることに疑いはなく、今後のグレイヴズ及びモダニズム研究におけるスタンダードを提供することになろう。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。